

第44回粘土科学討論会の報告

第44回粘土科学討論会は10月2日(月)から4日(日)にわたり北海道大学学術交流会館において開催されました。第1日は、2会場に分かれて口頭発表、特別講演およびシンポジウムがあり、第2日は、同じ会場にて口頭発表とポスター発表が行われました。最後の日は見学会に当てられました。

一般講演には口頭とポスター合わせて120件の発表がありました。講演内容は、本号掲載の講演概要にありますように、いつにも増して粘土科学の非常に多岐の分野にわたっておりました。地質学から生理学に及ぶ研究対象の広範囲なこと、用いられている研究手段の多彩さ、さらには基礎から応用(特に最近における環境浄化への応用等)を網羅する研究目的の広さには目をみはるものがありました。また近年の計算機シミュレーションの進歩に呼応して、理論的なアプローチによる研究発表が多かったことも目をひきました。まさに、“粘土鉱物の科学”が最先端科学の一分野として現在活発に進行中であることを如実に示す研究発表会であったと思われまふ。総会に先立って、今春他界されました須藤俊男先生のご冥福を祈り参加者全員による黙とうが行われました。もし先生がご存命であれば、今回の討論会にどのような感慨をお持ちになられたことであらまいしょうか。

発表毎に極めて活発な討論が行われ、その結果2日間とも、予定の時間を大幅に超過してしまいました。この点はプログラム編成に関しての来年度への反省点であります。また特別講演では、北大箕浦名知男教授による化石から探る地球の歴史、ニュージーランド・Landcare研究所のB.K.G.Theng教授による粘土・ポリマーナノコンポジットについての研究が紹介され、両者ともに会場をうずめた方々の興味を深くそそる内容でした。シンポジウムは、生命の起源における粘土の役割という観点から、粘土鉱物と有機化合物との相互作用を研究されてきた4人の方々の発表がありました。この普遍的に興味のある研究課題に対してそれぞれの観点からの成果と各自の意見が語られ、この問題解決のための方法論が活発に検討されました。総会では各賞の授与が行われ、また次期会長として中沢弘基氏(無機材質研究所)が選出されました。

見学会には17人の参加があり、北海道開拓記念館、江別市セラミックセンター、農材工業そして最後に北海道工業試験所野幌分場を訪問しました。かなり時間に追われた見学ではありましたが、参加した方々はそれぞれに楽しまれたようです。セラミックセンターにおいて各自の製作した陶芸作品の結果が待たれます。企画・案内の労をとっていただきました北海道工業試験所野幌分場の皿井博美氏に深く感謝致します。

最後に登録者数をまとめますと、正会員96名、学生会員46名、非会員31名で合計173名でありました。今回の総会において富田前会長が指摘されましたように、ホームページを通じた一般参加者の申し込み、および新会員の加入などは本学会のこれからの発展を暗示することとして大いに勇気づけられるものであります。最後に、北海道という参加には多額の費用と時間のかかる場所での開催にも拘わらず粘土科学発展のためにご参加いただきました方々に心より感謝申し上げます。

(代表：山岸皓彦)